

聴覚の障害を乗り越えて4年前、湖西市内にサーフショップを開店。コーヒーで客をもてなし、筆談で会話する姿が同じ障害者の共感呼び、ドキュメンタリー映画「珈琲（コーヒー）とエンピツ」の主人公として出演した。49歳。

この人

「映画の主人公になった感想は。」

「最初は『え、自分ができる？』と驚いたのが本音。しかし、耳が不自由でもできるということを知ることがある機会をもらえたことは良かった」

「経営上の苦労は。」

「最も悩んだのはやはり」

お太田 辰郎さん（西原区）

「客との会話。コーヒーサービスは、自分が聞けないことを相手に伝えるきっかけ作りの工夫として考えた。客も快く筆談してくれるのが、今は何よりうれしい」

「障害者が活躍できる場所はまだまだ少ないのでは。」

「近年は理解が広がってきたとはいえ、コミュニケーションの取り方が分からず、まだ人と人との間には壁がある。一人一人が輝ける社会になればいいと感じる」



サーファー歴31年。「良い波に乗れた時の満足感が最高」と語る。



ドキュメンタリー映画に主演の聴覚障害者